



Title	月刊DRF 第74号
Author(s)	デジタルリポジトリ連合
Issue Date	2016-03-01
Doc URL	http://hdl.handle.net/2115/73642
Type	periodical
Note	事務局: 北海道大学附属図書館; http://drf.lib.hokudai.ac.jp/ で公開したもの
File Information	DRFmonthly_74.pdf



[Instructions for use](#)



月刊 DRF

Digital Repository Federation Monthly

第74号

No.74 March, 2016

- 【特集1】平成27年度企画ワーキンググループ活動報告
- 【特集2】オープンアクセス・ポリシー事情
- 【レポート】北海道地区機関リポジトリ実務担当者研修報告
- 【連載】今そこにあるオープンアクセス 第17回
「オープンアクセス・リポジトリとSNSの違いは何か？」

【特集1】

平成27年度企画ワーキンググループ活動報告

オープンサイエンスに関する各種報告書発表、機関のオープンアクセスポリシー採択と、国内機関リポジトリが新たな段階に差し掛かった平成27年度。DRF企画ワーキンググループでは月刊DRFの解説記事の充実やオンラインワークショップの実施と、これまでの活動を着実に充実させた1年になりました。今年度の活動を簡単にご報告します。

主査・副査ご挨拶

今年も1年間、企画WGの活動にご協力いただきありがとうございます。

日々の業務で忙しい毎日。1人1人にできることは限られていますが、力を合わせれば大きなものになります。DRFがそんなみなさんの一歩前に踏み出すきっかけになれば幸いです。
主査 松本侑子 (広島大学)



ワーキンググループ メンバーより

1年間活動する中で、リポジトリの役割や最新動向について勉強させて頂いたことは貴重な経験となりました。
(北海道大学 笠井)

昨年の図書館総合展で複数ある機関リポジトリコミュニティを一本化する話が浮上しました。一本化がコミュニティの活性化につながることを期待しています。新コミュニティでも、これまでDRFで行ってきた情報発信や情報共有、研修などの活動を引き継いでいきたいと思えます。
副査 佐々木翼 (北海道大学)



1年間活動してみて、オープンアクセスポリシーや研究データなど、リポジトリ周辺の動きの活発さを体感できたように思います。
(神戸大学 下村)

あっという間のその中に、様々な動きのあった一年でした。人の知識・経験・関係も「ひたひた」と培ってきたDRFの、今年度の「ひた」が、その動きに立ち向かう一助となれていれば幸いです。

そしてまた、来年度の「ひた」を産み出すあなたのご参加もお待ちしております！

副査 中谷昇 (鳥取大学)



さらなるリポジトリの可能性について考えさせられた1年だった気がします。これからも、皆様でより良い形をつくっていきましょう！
(広島大学 川村)

研究集会・ワークショップ

■2015/11/11 機関リポジトリ推進委員会主催「機関リポジトリの近未来：オープンアクセスからオープンサイエンスへ」（図書館総合展フォーラム第5会場）を共催。企画WGでは特に、第3部「機関リポジトリの今、近未来のために」の企画・運営に協力しました。

■2015/11/18～2016/2/29 DRFオンラインワークショップ「研究データから研究プロセスを知る」を実施。14機関から14名の方にご参加いただきました。各機関での研究者インタビューを分野ごとにまとめ、事例集として公表予定です。

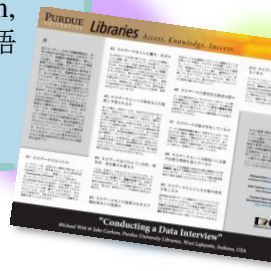


国際連携

■DRF参加機関へ、オープンアクセスウィークへの参画を呼びかけ。広報用グッズや各機関の様子をご提供いただき、Webページにまとめました。<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drif/index.php?oaw2015>

■オンラインワークショップに関連してMichael Witt & Jake Carlson, Purdue University Libraries, "Conducting a Data Interview" を日本語訳・公開しました。

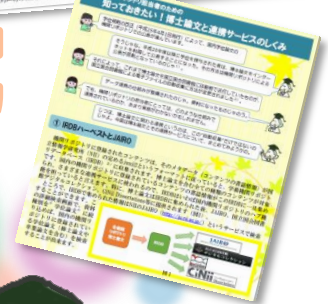
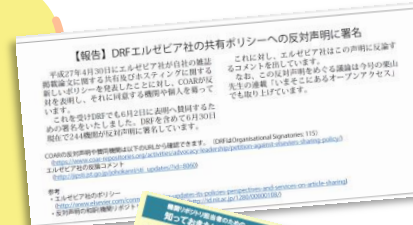
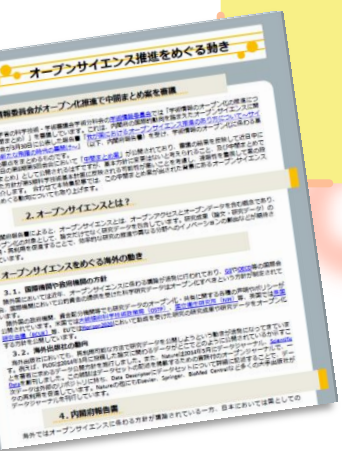
<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/drif/index.php?Foreign%20Documents>



情報共有

■月刊DRFを発行。国内外のオープンアクセス・オープンサイエンスの状況を取り上げました。

- エルゼビア社共有ポリシーへの反対声明に署名 (第66号)
 - 博士論文と連携サービスのしくみ (第68号)
 - オープンサイエンス推進をめぐる動き (第69号)
 - オープンアクセス方針のイロハ (第73号)
- ほか



振り返ると今年もいろんな活動をしてきたんじゃのう。
わしもたくさん出番があって大満足じゃ！



インタビューやレポート執筆など、たくさんの方にご協力いただきました。みなさん本当にありがとうございました！



【特集2】オープンアクセス・ポリシー事情

平成27年5月に京都大学においてオープンアクセス方針が採択されてから、2月19日現在までに、新たに4機関で方針が採択されました。

今回は月刊DRF第65号に続き、その内容や採択の背景など、気になるポイントについて、筑波大学・国際日本文化研究センター・九州大学の3機関へお話を伺いました（採択順）。

筑波大学
学内説明会の様子



▲芸術系会場

◀図書館情報メディア系会場

1. 筑波大学 (平成27年11月19日採択)

回答：筑波大学 船山 桂子氏

Q 今回採択されたオープンアクセス方針の趣旨と、特にポイントとなる点を教えてください

大学における、情報公開の推進と社会に対する説明責任を目的として、所属教員の教育研究成果をつくばりポジトリで公開することを方針に決めました。これにより、つくばりポジトリは教員執筆の学術雑誌掲載論文をより積極的にリポジトリ登録することとなります。

Q オープンアクセス方針採択までの経緯を教えてください

本学では、イノベーションの創出につなげることを目指した研究成果の発信が肝要であるとして、第3期中期目標・中期計画（案）に、その研究成果に対する社会からの容易なアクセス・利用のため、具体的方策の検討・実施を盛り込んでいます。これに基づいた学長指示のもとに、2015年4月から関連規則の見直しおよび方針等の検討を始め、7月の附属図書館運営委員会、11月には、学副懇談会、運営会議、教育研究評議会の承認を経て採択されました。

Q オープンアクセス実現にあたっての実施体制を教えてください

登録対象となる論文の収集には、担当者が著者に通知して提供を求める方法と、教員が筑波大学研究者総覧に自身の論文情報を入力する際に、リポジトリ登録用の論文ファイルをアップロードする方法を併用しています。前者の場合、今後は、出版社版が使用可能な論文は、著者の承諾を確認せずに登録できるようになりました。

Q 学内説明会を開かれたとお聞きしましたが、概要を教えてください

教員所属組織の内、希望のあった13組織を対象に実施しています（2月15日現在で10組織を終了）。説明会は30分～1時間とし、その前半に説明、後半に質疑応答時間を設けました。参加人数は10～30名、多いところでは40名を超えています。この他、3月には附属図書館を会場とした開催も予定しています。

Q 具体的な説明内容について教えてください

方針採択の背景としてオープンサイエンスの動向を解説した後、本学の方針について、目的・対象・手段と登録による効果を説明しました。教員に求める対応は、方針採択以前と大きく変わるところはありませんが、研究活動の妨げになるものではないことを強調して理解を求めました。

Q 研究者の皆様からの反応について教えてください

以前からリポジトリへの研究成果提供を呼びかけていたため、概ね肯定的な反応が得られました。また、リポジトリの存在を改めてアピールする機会にもなりました。多かった質問は、以下の点でした。

- ・共著者許諾はどのような方法で行えばよいのか
- ・リポジトリに登録された著者最終版の引用が行われることはあるか、また、混乱は起きないか
- ・教員は具体的に何をすればよいのか
- ・研究データはリポジトリで取り扱えるのか
- ・筑波大学研究者総覧とのデータ連携は可能か

Q 貴学における今後の展望がありましたら教えてください

本学は、中期計画（案）に「オープンサイエンスの推進」を掲げています。分野によって異なる研究データの取扱いや研究者情報との連携など、研究推進部と協働して取り組んでいく予定です。

2. 国際日本文化研究センター (平成27年12月17日採択)

回答：国際日本文化研究センター 山田 奨治先生

Q 今回採択されたオープンアクセス方針の趣旨と、特にポイントとなる点を教えてください

公的資金を使った研究成果にアクセスしやすくすることは、社会的な要請だと考えています。一方で、当センターの教職員は商業出版も重視しているため、それと共存できる仕組みになるよう配慮しました。また専任教員だけでなく、事務・技術職員や客員研究員、センター外の共同研究員、大学院生などを広く対象者に含めたことも特色といえそうです。

Q オープンアクセス方針採択までの経緯を教えてください

当センターの出版物が、リポジトリ、データベース、出版物のWEBページに分散されて公開されていて、しかもそれぞれが外部から見えにくい状況がありました。それらをリポジトリに一元化する機会にオープンアクセス化することを、教員とすべての課の職員から成るワーキングを作って議論してきました。執行部からはスピード感を持って進めるように指示があったこともあり、平成27年8月から議論をはじめ3ヶ月間でオープンアクセス方針案を含む報告書にまとめました。

Q オープンアクセスに対する教員の皆様のお考えや、方針策定についての反応を教えてください

すでに科学研究費補助金の報告書で成果のオープンアクセス化の有無が問われるようになっていきますので、とくに抵抗なく受け止めてもらえました。成果物を提出しない簡便な方法で非公開の意志表示ができるようにしたこと、京都大学で先行事例があったことも大きかったと考えます。

Q オープンアクセス実現にあたっての実施体制を教えてください

資料課(図書館)に兼任の担当者を3名置き対応しています。仮に定めた実施要領に基づいて、4名のモデル教員による試行を平成28年10月末まで実施します。問題のないことを確認できたら実施要領を確定し、本格運用に入る予定です。出版社等から許諾を得るのは著者の責任としていますが、教職員がよく寄稿している媒体とは、包括許諾契約を結ぶことも考えています。

Q 貴センターにおける今後の展望がありましたら教えてください

当センターが購入した高額資料や画像資料などは原則としてデジタル化・データベース化して広く一般に公開する方針を以前からとっています。当センターは大学共同利用機関として、社会の要請に沿った責務を、今後も果たして参ります。

3. 九州大学 (平成28年1月19日採択)

回答：九州大学 星子 奈美氏

Q 今回採択されたオープンアクセス方針の趣旨と、特にポイントとなる点を教えてください

九州大学オープンアクセス方針は、九州大学学術憲章に基づき「開かれた大学としてその研究成果を学外に開示し、人類と社会に貢献する学術研究の国際的拠点となることを目指す」ことを趣旨としています。

リポジトリ専門委員の教員を中心とした検討の積み重ねにより方針の素案が作成されたことは、大きなポイントだと考えています。上記の趣旨や、第8項の「本学は、本学のオープンアクセスがその趣旨に照らし有効に機能しているか、絶えず検証する」といった表現は、教員からの提案によるものです。検討過程では研究活動による社会貢献について本質的な議論がおこなわれ、図書館として多くの示唆を受けました。

Q オープンアクセス方針採択までの経緯を教えてください

2015年3月に公表された内閣府報告書「我が国におけるオープンサイエンス推進のあり方について」が契機となり、方針の検討を開始しました。九州大学学術情報リポジトリ専門委員会の下に専門部会を組織し、2015年7月から9月までの集中的な議論により素案を作成しました。素案作成の過程では、京都大学や海外の大学等の先行事例を参考としました。その後、各部署での検討、役員等への説明、11月24日のリポジトリ専門委員会、12月10日の附属図書館商議委員会を経て、2016年1月19日の教育研究評議会において方針が決定されました。

Q 実際の運用はこれからとのことですが、現時点における貴学の今後の展望がありましたら教えてください

方針の実施に向けた実施要領の整備や、方針とリポジトリ運営指針の整合性について、リポジトリ専門委員会において引き続き検討する予定です。また、研究データに関しては、2015年8月より「研究データの保存等に関するガイドライン」に基づくデータ保存が実施されていますが、データの公開は今後の課題となっています。図書館と学内関連部署が密接に連携しながら、オープンサイエンスの動きに対応していきたいと思っております。

インタビューにご協力下さった皆様
どうもありがとうございました



「今更聞けない 機関リポジトリのコンテンツ収集と広報」

2016年
2/12
FRI



はじめにコンテンツ収集と、広報について事例報告をいただきました。コンテンツ収集事例では以下の報告がありました。

帯広畜産大：リポジトリ運用開始時、140名の教員の研究室を訪問し、リポジトリへの理解を求めた。
室蘭工業大：教員データベースとリポジトリを連携予定。研究業績を追加する際、リポジトリ公開可否を入力。
(基本は公開、非公開には理由が必須)

また、帯広畜産大では著者最終稿を公開することへの抵抗が大きく、なかなか提供数が増えないという悩みを抱えていることが述べられました。広報事例としては、以下の取り組みが報告されました。

天使大：リポジトリの愛称とロゴを学内募集し、認知度の向上を図る。
北 大：リポジトリ説明チラシ配布、研究室訪問活動の実施、博士論文インターネット公表説明会の開催。

これを受けてグループワークでは、効果的なコンテンツ収集法と広報についてアイデアを出しあい、グループごとに提案をまとめていただきました。発表された提案内容は以下の通りです。

- ・コンテンツ収集と広報による周知を一体で行う。
- ・論文に限らず学内成果物すべてを収録し学内外での認知度を上げる。(講義ノート、学生向け広報誌、美術作品の写真、演奏会の動画など)
- ・文献の提供依頼時は、著作権ポリシーを確認した上でお願いします。
- ・登録により得られるメリットを先生方に地道にお伝えし続ける。
- ・研究業績評価と連携させる仕組みを作る。
- ・キャラクターがいる場合は着ぐるみや立体物を作成して広報する。

参加者からは少人数のグループワークだったので気さくな雰囲気良かった、基本的なテーマだったので参加しやすかったという声が聞かれました。年度末近くは開催を避けて欲しいという意見も出ましたので、日程については今後の課題になりそうです。

機関リポジトリについて、担当者同士で抱える悩みについて話ができる環境が少ないからこそ、こういった研修の場が大切だと感じました。今後も人的ネットワーク形成の場としての役割を担っていければと思います。

2月12日(金)北海道大学にて、DRFの後援により北海道地区機関リポジトリ実務担当者研修を開催しました。機関リポジトリの実務担当者が共通の課題として持っているコンテンツの収集と広報についてワークショップ形式で考えること、また道内機関リポジトリ担当者の人的ネットワーク醸成の機会とすることを目的として行った今回の研修について、報告します。

笠井 美由紀

(DRF企画WG・北海道大学)

主催 北海道大学附属図書館

後援 デジタルリポジトリ連合

会場 北海道大学附属図書館

スケジュール

参加者自己紹介(20分)
コンテンツ収集
事例報告 (10分)
広報事例報告 (10分)
グループワーク(120分)
グループ発表 (20分)

今そこにあるオープンアクセス 第17回

オープンアクセス・リポジトリとSNSの違いは何か？

What is the difference between an open access repository and a social networking site?

1月に開催されたSPARC Japanセミナーのテーマは「研究者向けソーシャルメディアサービスの可能性」だったが、その後まもなく、米国図書館員のメーリングリストLIBLICENSEでもソーシャル・ネットワーキング・サイト(SNS)とオープンアクセス(OA)・リポジトリの違いが話題になった。

きっかけとなったのは「ソーシャル・ネットワーキング・サイトはオープンアクセス・リポジトリではない」と題するブログ記事だが、これ自体は同じタイトルのカリフォルニア大学学術コミュニケーション事務局による、学内研究者向けのブログ記事を紹介したものである。

それによると、研究者向けSNSの例としてResearchGateとAcademia.eduがあり、その主目的は研究者を共通の関心で結びつけることである。利用者は自分のプロフィールを作成し、業績リストや著作原稿を掲載して、交流の相手を探すことができる。両方とも商用サービスである。Academia.eduのURLには教育機関を示す“.edu”が使われているが、これはドメイン名に関するきちんとしたルールができる前に登録されたもので、実際はAcademia Inc.という営利企業によって運営されている。

OAリポジトリは大きく機関リポジトリと主題ベースのリポジトリの二つに分けられ、SNSとは次のような違いがある。

- データのエクспортやメタデータの自動収集に対応している。SNSはデータの自動収集を許可していない。
- 大学、政府機関、非営利団体などにより運営されており、長く存続する可能性が高い。図書館員や長期保存の専門家が配置されていることも多い。SNSを運営しているのは営利企業なので、企業側の都合で突然閉鎖されることもあり得る。

- SNSのように個人情報をもとにさまざまな電子メールが送り付けられることはない。

というわけで、特に長期保存とOAへのコミットメント（日本人には理解が難しい言葉だが、誓約とか献身といった意味合い）という点で、SNSはOAリポジトリとは異なり、現時点ではカリフォルニア大学のOAポリシーの要求を満たすものとはみなされない。

もちろん、SNSの利用を否定しているわけではない。役立つと思えば使えばいいのだが、利用条件を知って設定を管理する必要がある。いずれにせよ、カリフォルニア大の機関リポジトリ eScholarshipもお忘れなく、というのが締めくくりである。

メーリングリストにはこの記事の著者本人が登場し、「Academia.eduに入ってるからOAポリシーに従ったことになるよね」という教員の言葉が、こうした解説を書く動機になったと明かしている。日本でも、SNSとOAリポジトリを同じようなものとみなしている研究者は多いと思われる。両者の違いを説明する必要が生じたとき、この記事が参考になるだろう。



栗山正光

首都大学東京学術情報基盤センター教授
デジタルリポジトリ連合アドバイザー

【Researchmap】

<http://researchmap.jp/read0195462>

次号 予告

【報告】オンラインワークショップ「研究データから研究プロセスを知る」
【連載】かたつむりとオープンアクセスの日常 ほか

読者アンケートにご協力ください。

http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf_inq.html

 <http://www.facebook.com/DigitalRepositoryFederation>

月刊DRFでは、みなさまからのお便りをお待ちしています。→gekkandrf@gmail.com

編集後記

今年度も月刊DRFをご愛顧いただきありがとうございます。機関リポジトリ新協議会（仮称）やオープンサイエンスの動向等、来年度に向けて気になる話題がたくさん出てきた平成27年度でした。来年度も月刊DRFをよろしく申し上げます！

<http://drf.lib.hokudai.ac.jp/gekkandrf/>

月刊DRF第74号 平成28年3月1日発行 デジタルリポジトリ連合

